東京有明医療大学 保健医療学部 鍼灸学科
第３回海外研修記
―ボストン研修2015―

平松　燿　大渕修哉　高倉伸有

東京有明医療大学　保健医療学部　鍼灸学科

「ボストン研修2015」概要

【研修目的】

ボストン研修は，「国際性に富む有為な人材を育成する」という本学の教育理念に対し，(1) 世界の鍼研究を牽引する科学者（本学鍼灸学科客員教授で Harvard Medical School の Kaptchuk 教授と Kong 准教授）の講義を体験し，(2) アメリカにおける鍼灸の教育機関や研究機関（New England School of Acupuncture，Martinos Center for Biomedical Imaging，Massachusetts General Hospital，Harvard University，MCPHS University）での研修や見学を通じて，グローバルな視点を持った鍼灸学士となるための意識を高め，(3) アメリカの生活・文化・自然・歴史などに触れ，人生観や世界観を広げることを目的として実施しました.

【研修スケジュール】

9月7日（月）

22：30　東京国際空港（羽田空港）国際線ターミナル集合
24：30　東京国際空港（羽田空港）　発
・・・・・・・<日付変更線通過>・・・・・・・
19：00　Los Angeles International Airport　到着（乗り継ぎ）
22：10　Los Angeles International Airport　発

9月8日（火）

6：40　Boston Logan International Airport　到着
8：30　ボストン市内観光
13：30　Sheraton Boston Hotel 到着
14：30　Museum of Fine Arts, Boston（ボストン美術館）　見学

9月9日（水）

9：45　MCPHS Universityにて研修
- 国際プログラム副センター長 George Humphrey 博士の挨拶
- MCPHS University の紹介
- 施設見学
- Lunch

15：00　Harvard University, Harvard Coop　周辺散策
18：00　Fenway Park にてメジャーリーグ観戦

9月10日（木）

8：20　New England School of Acupuncture（NESA）にて研修
- Joseph Kay 先生の講義・実習
- 施設見学

東京有明医療大学保健医療学部鍼灸学科　E-mail address：takakura@tau.ac.jp

• Lunch

13：30　CULIA KI CLINIC にて研修

• 施設および治療見学・講義

16：00　Harvard Medical School のオフィスにて研修

• Ted Kaptchuk 教授の講義

9月11日（金）

10：00　Martinos Center for Biomedical Imaging にて研修

• Jian Kong 准教授の講義

• 施設見学

• 学食にて Lunch

13：30　Massachusetts General Hospital 施設見学

9月12日（土）

10：00　Massachusetts Institute of Technology Museum（MIT博物館）見学

13：00　ボストン郊外にてフィールドワーク

9月13日（日）

11：00　Boston Logan International Airport　発

13：10　Detroit Metro Airport　到着（乗り継ぎ）

13：55　Detroit Metro Airport　発

・・・・・・・<日付変更線通過>・・・・・・・

16：05　成田国際空港着・解散

【ボストン研修2015 参加者】

東京有明医療大学 保健医療学部 鍼灸学科

大渕 修哉（４年）・立川 諒（４年）・寺岡 直之（４年）・平松 燿（４年）・脇本 美優（４年）
内田 裕（３年）・梅田 菜緒（３年）・小畑 侑令絵（３年）・加藤 晃（３年）・上郡 美紀（３年）
神山 弥仁（３年）・北田 卓（３年）・高 潤載（３年）・佐久間 和也（３年）・佐藤 賢太（３年）
鈴木 麻美（３年）・荘 梓鳳（３年）・松浦 知史（３年）・丸山 淳（３年）・渡辺 陽平（３年）
山口 渉（３年）・山中 誠太（３年）・青山 尚樹（２年）・伊藤 良子（２年）・小野寺 雅之（２年）
小林 大輝（２年）・小正 太（２年）・篠塚 伸浩（２年）・納部 瑠夏（２年）・村越 祐介（２年）

東京有明医療大学 保健医療学研究科 保健医療学専攻 鍼灸学分野

廣田 順子（２年）・奈須 守洋（２年）・松浦 悠人（２年）

日本鍼灸理療専門学校

梶間 美智子（昼本科３年）・小口 志保子（昼専科１年）・宇都宮 健二（夜専科２年）・犬飼 祐樹（夜専科１年）

鍼灸学科 引率教員

高倉 伸有（教授）・矢嶌 裕義（講師）・高山 美歩（助教）・高梨 知揚（助教）・菅原 正秋（講師）

夢が広がったボストン研修 －世界の鍼に触れて－

東京有明医療大学 保健医療学部 鍼灸学科 ４年　　**平松　燿・大渕　修哉**

2015年９月７日から14日までの１週間，私たち鍼灸学科２～４年生30名と大学院生３名，日本鍼灸理療専門学校生４名の総勢37名は，アメリカ東部マサチューセッツ州にあるボストンでの鍼の研修に参加した．主な研修内容は，本学の客員教授であり，Harvard Medical School で鍼医学の発展を牽引する Ted Kaptchuk 教授と Jian Kong 准教授の講義や両先生との学術的交流，アメリカの医学教育機関である MCPHS University や New England School of Acupuncture（NESA）での授業体験や施設見学，またこれらの教育機関で私たちと同じ医学を学ぶ学生たちとの価値観の共有，世界的な研究機関である Harvard University，Martinos Center for Biomedical Imaging，Massachusetts General Hospital の施設見学，そしてボストン市内の歴史ある建造物やボストン美術館への訪問など，現地の人々の文化や生活に触れ，実際に体験することであった．私たちはこれらの様々な体験を通じて，人として，また将来医療に携わる人間として，広い視野を持つことの重要性を心から実感した．この研修を境に，本当に人生観が大きく変化したような気がした．

第１日目：９月７日（月）

22時30分に東京国際空港（羽田空港）に集合し，この研修を最初から最後までコーディネートしてくださった近畿日本ツーリストの二川目さん，この旅をナビゲートしていただくことになる添乗員の穴吹さんと挨拶を交わした．その後，出国前の最終チェックとしてパスポートや ESTA（電子渡航認証システム）の登録の確認を行い，各々，旅の最初の関門である搭乗手続きへと向かい，出国の時を待った（写真１）．

第２日目：９月８日（火）

日付が変わって０時30分，日本を出国する時間となった．初めて国外に行く者や，初めて飛行機に乗る者もいて，期待と不安が入り混じっていた．羽田空港を発ち10時間半，乗り継ぎの Los Angeles International Airport での入国審査を終えて，国内線へと乗り継いだ．日付変更線を通過しているので，実際には19時間ほどかかって，朝の６時40分 Boston Logan International Airport に到着．到着とともに美しい朝日が私たちを迎え入れてくれた．

空港からバスに乗り込み，まずはボストン市内を観光し，ボストンの歴史や文化に触れた．最初に訪れた Harvard University の敷地の広さは，私たちが想像していた以上であった．構内に複数ある図書館の中でも Harry Elkins Widener Memorial Library は約1,530万冊の蔵書を有しており，学術図書館として世界最大級の規模を誇っているとのことであった．また書物が非常に多いため，地下を掘って書物を保管しているというスケールの大きさも，アメリカを感じた瞬間であった．

Harvard University を後にして，州議会議事堂，Faneuil Hall，Quincy Market，Trinity Church や Beacon Hill などの歴史的建造物のほか，John Hancock Tower のような全面ガラス張りの現代的な建物なども見学し，古くからの街並みのなかに新しい建物が融合し調和したボストンならではの風景を十分に堪能することができた．

その後，帰国するまでお世話になる Sheraton Boston Hotel に荷物を置き，電車で Museum of Fine Arts, Boston（通称：ボストン美術館）に向かった（写真２）．所蔵品は50万点を数え，８部門に分かれて展示されていた．歴史的に有名な数多くの美術家たちが残した作品は，未熟な私たちにとって理解の及ばない部分が多かった．しかし，それらの絵画や彫刻にどのようなメッセージが込められているのかを考えながら，全身でその作品を感じようとすると，それまではあまり馴染みのなかった芸術の素晴らしさに触れることができた気がした．

Museum of Fine Arts, Boston を後にし，滞在先のホテルに戻り，ホテル内のレストランでディナーをとった．昼間訪れた Quincy Market では，英語でのコミュニケーションが不慣れで本場のクラムチャウダーを食べ損ねていたので，ホテルでクラムチャウダーを食べられたのは嬉しかった．それに舌鼓をうちながらも，慣れないロングフライトと時差ボケで疲れと眠気がひどかったため，静かに食べて早めに部屋に戻り，就寝した．

第３日目：９月９日（水）

ホテルの部屋で迎えた２日目の朝は，時差ボケで早起きをしてしまった者が多かった．そのため，朝の時間をホテル付属のジムやプールで過ごしたり，チャールズ川沿いを散歩したりして自由に過ごしていたようだった．

９時にホテルのロビーに集合し，電車で MCPHS University に向かった．MCPHS University では，国際プログラム副センター長である George Humphrey 先生の挨拶や，大学の歴史や概要についての説明があった（写真３）．MCPHS University は日本での薬学大学に相当し，開学が1823年と全米で２番目に古く，在籍学生数は6,935人で，ボストンの校

舎だけでも4,719人が在籍しているという大規模な大学であった．19世紀初期の開学ということから，古い建物を想像していたのだが，見学した建物はすべて新しく近代的な雰囲気が漂うものだった．しかしよく見ると，新しい大学の建物内に，古い大学の建物があることに気づいた．このことについて質問をしたところ，古い建物は歴史的建造物として重要なため取り壊さず，これを新しい建物で覆う形で残しているとのことだった．日本では見たことのない保存の方法であったため，とても驚きを覚えたのと同時に，歴史的な建造物を残そうとするその姿勢に，日本の Crush&Build 式のやり方に違和感を覚えた．また，MCPHS University の大学院生の案内で，大学内にある実際の薬局を模した実習室や，デンタルクリニック，直接学内につながっている学生寮や，24時間利用可能なパソコン室などの施設見学を行った．中でも，５万冊を超える量の電子書籍を蔵している図書館では，ログインすることでいつでも電子書籍などが読めるような環境が整備されていたのは，さすが最先端を行く大学だと思った（写真４）．

その後，ボストン市内を隈なく走る地下鉄に乗って Harvard University に行き，周辺を散策した．学園都市なので落ち着いた静かな街なのだろうと想像していたが，実際には，駅周辺はとても賑わって活気のある街であった．また，Harvard Coop では，そこでしか購入できないペンやノートなどの筆記用具や，洋服や帽子などの衣類などの様々な Harvard 関連の商品がたくさん並べられていて，そこにいるだけで Harvard University の学生になったかのような気分を味わうことができた．

Harvard University 周辺の散策を終え，一度ホテルに戻った後，アメリカ最古の野球場である Fenway Park に徒歩で向かった．Fenway Park では，Toronto Blue Jays vs. Boston Red Sox の試合の観戦をした．球場に到着したのは試合開始の１時間前にもかかわらず，球場周辺は大道芸や多くの出店で賑わっており，レギュラーシーズンの試合にもかかわらず，日本シリーズ以上に盛り上がっていた．世界最高峰のリーグで活躍する選手たちの姿や，その中で日本から渡米した選手が活躍している姿をこの目で見られたこと，また試合観戦を上手に楽しむアメリカ人の姿を目の当たりにしたことは，これからの私たちの生活に励みを与えてくれる，まさに生きた教材であった．

第４日目：９月10日（木）

ホテルでの朝食はバイキング形式で，本場のカリカリのベーコンや指３本分ぐらいある太さのソーセージ，多くの具材から好みの具材を選んでシェフが目の前で作ってくれるオムレツなど，朝食時でも異文化を感じられる時間であった．また朝のボリュームある食事は，私たちの研修意欲の大きな活力となった．

午前中は，ボストン市内にあるアメリカで最も古い鍼の大学院大学である New England School of Acupuncture : NESA での研修で，講義や実習のほか，施設見学をさせていただいた．講義は，日本の鍼が専門の Joseph Kay 先生による「経絡治療」の授業を，現地の学生とともに受講した．その後の実習では，脈診と腹診を行い，証を立てて治療穴を決めるという，私たちにも馴染みのある経絡治療の実際を体験することができた（写真５，６）．NESAの学生が，術者として患者役の私たちに刺鍼するという形式で実習が進められ，いつも私たちが実習で学んでいるように，NESA の学生も同じく日本の細い鍼をとても丁寧かつ慎重に扱う姿を見て，日本独特の鍼法が世界に普及しつつあることを感じた．また同時に，私たち日本人も，日本の鍼法を日本で学んでいるからといって安穏としてはいられないことに気づき，今後日本の鍼を普及させるためには更なる学習が必要であると感じた．昼食は学内でピザをご馳走になりながら，私たちと同じように鍼灸を学んでいる現地の学生とのコミュニケーションの機会を得た．「日本の鍼の繊細でシンプルなところに惹かれた」など，日本鍼を理解し，支持している人が多いことを知ることができ，とても有意義な時間を過ごさせていただいた．

NESA から20分ほど歩いた場所に，Massachusetts 州の Acupuncturist（鍼灸師）のライセンスを持っておられる，日本人の桑原浩榮先生の鍼灸院があり，実際に見学させていただいたり，アメリカの鍼灸事情についてのお話を伺ったり，治療のデモンストレーションを行っていただいたりした．桑原先生は NESA で講師もされており，アメリカに『日本の鍼』を広めた第一人者でもある．鍼灸院には心因性の問題を抱えた患者さんや小児が多く来院するそうで，先生ご自身の体験も踏まえ，患者さんと向き合うためには，治療家自身の体調を万全に整えておくことが大事なのだと教わった．日本の鍼灸の看板を背負ってアメリカで頑張っておられる姿から，活躍の場所は日本だけでなく世界中至るところにあるのだと勇気づけられた．

午後はバスと地下鉄を乗り継ぎ，Harvard Medical School の Ted Kaptchuk 教授のオフィスに向かった．当初は，Kaptchuk 先生のオフィスから散策しながら徒歩で Harvard Medical School の病院に向かい，そこで講義をしていただく予定であった．しかし，あいにくの雨だったため，急きょ Kaptchuk 先生のオフィスで講義を受けることになった（写真７）．Kaptchuk 先生には「Components of placebo effect : randomized controlled trial in patients with irritable bowel syndrome」というテーマで，鍼やプラセボに関する講義をしていただいた．はじめに，ドイツの保険会社が主体となって行った，鍼に対して保険を適用させるための大規模な臨床研究（Randomized Controlled Trial：RCT）のお話

をしていただいた．現在では，鍼の研究においても RCT が当然のように実施されているが，この画期的な研究のデザインは，1948年に確立されたものだという．それまでは，治療効果を医療者の所見のみで判断していたが，RCT では「本物の治療」と「偽物の治療」のどちらが患者に適用されるのかが分からないため，２つの治療群の効果を比較して「偽物による治療効果（プラセボ効果）」と「本物の治療効果」を分けて考えることができるようになったのだそうだ．また，ある疾患に対しては薬物治療よりも鍼治療のほうが，本物鍼治療よりも偽鍼治療のほうが，治療効果が高いという研究結果や，それら数多くの RCT の結果を meta-analysis と呼ばれる方法で解析し，鍼治療が確固たる科学的根拠に基づいて有用であるという結果を示した論文も紹介してくださった．最後のテーマは，Kaptchuk 先生が2008年に発表された「過敏性腸症候群の患者に対する鍼の効果」に関してであった．この RCT では，施術者と患者さんの信頼関係が構築されていない群よりも，施術者が患者さんに対して献身的な態度をとり信頼を得た群のほうが，偽鍼治療であっても，症状や QOL が改善されたと報告されていた．Kaptchuk 先生ご自身も，この両群に大きな差が出るとは想像しておらず，プラセボ効果の大きさに驚いたのだそうだ．また Kaptchuk 先生が「治療の前にその治療が患者にとって良いものであるのかどうかを判断しなければならない」とおっしゃっていたのも，とても印象的だった．質疑応答の時間も，私たちの希望で予定よりも長く取っていただき，私たちの疑問に対して，先生は終始笑顔でひとつずつ丁寧に，ユーモアを交えて回答してくださったことには，とても感激した．世界の Harvard の教授と親密な時間を共有できたことは，私たちの貴重な財産となった（写真８）．

第５日目：９月11日（金）

日本と13時間の時差にも慣れ始め，朝のジムやプールでの運動も日課になってきた．そして迎えた５日目は，Harvard University と Massachusetts Institute of Technology（MIT）が共同出資し運営を行っている，Massachusetts General Hospital の研究施設のひとつである Martinos Center for Biomedical Imaging で研修を受けた．地下鉄とバスを乗り継いで向かう途中から，Harvard Medical School の Jian Kong 准教授による講義に胸を踊らせていたのを，今でもはっきりと覚えている．厳重な警備を抜けて建物内に到着すると，Kong 先生が笑顔で私たちを迎え入れてくださった．

はじめに，Kong 先生の Research Assistant である Ana Ortiz 先生から Martinos Center の歴史や概要，施設で使用している研究設備の説明をしていただき，1999年に 2,000万ドルの寄付により設立されたと聞き，非常に驚いた．Kong 先生の講義は「Expectancy and treatment interactions : A dissociation between acupuncture analgesia and expectancy evoked placebo analgesia」「An fMRI study on the interaction and dissociation between expectation of pain relief and acupuncture treatment」という，最先端の脳科学による鍼の効果のメカニズムを解明する研究がテーマだった（写真９）．講義のはじめに，脳の機能は分子レベルで見ることも重要であるが，脳全体がどのような活動様式を示しているのかを知ることも重要であると教えてくださった．慢性痛を持つ患者さんの脳では，痛みの抑制回路の変化や，痛みを調節する神経がうまく活動していない可能性があるそうだ．また，たとえ偽鍼治療であっても，治療効果に強い期待を寄せれば本物鍼治療と同程度の鎮痛効果が得られるが，その時の脳活動の部位は，すなわち鎮痛のメカニズムは，本物鍼治療と偽鍼治療で異なるという興味深い研究結果が出ているとのことであった．さらには，Kong 先生の研究グループでは，わざと被験者に治療効果の期待を持たせるようにして治療を行った群と，期待を持たせない群で治療効果を比較する，という，私たちが想像したことがない新鮮な実験方法による結果も紹介してくださった．このような手法を用いて鍼の効果のメカニズムを解明していくことは，今は小さいように見える一歩でも今後の業界の発展に繋がっていく大きな一歩になるのだと思った．このように鍼治療の科学的根拠が得られれば，将来の私たちの仕事を強力に後押ししてくれることになるだろうし，患者さんに鍼灸の治療効果を説明する上で大きな自信となると感じた．

講義終了後，Martinos Center 内の Kong 先生のオフィスと施設を見学させていただき，その後バスで Massachusetts General Hospital まで移動して，Kong 先生自ら施設を案内してくださった．この病院には，エーテルドームと呼ばれる，世界で初めて全身麻酔下で手術を行った階段教室があり，現代では欠かせない麻酔医学の最初の一歩がここで踏み出されたのだという事実を肌で感じることができた（写真10）．

ホテルに戻り，この日は初めて各人思い思いに街に出て夕食をとった．私たちのグループは，本場のファーストフードを体験するべく，日本にもある“Wendy's”に行った．値段は日本より安いにもかかわらず，量は日本よりも多いのには戸惑ったが，アメリカが肥満大国と言われるのはこのような食文化によるのだということを体感したという意味でおもしろい経験だった．

第６日目：９月12日（土）

研修終盤となったこの日は，早起きをしてすっかり馴染んだボストンの街を散歩し，朝の時間を過ごした．ボストンでは朝の散歩やランニングを楽しんでいる人が多く，すれ違う人々は笑顔を返してくれた．慌ただしく過ごす日々の中

で忘れがちな人との関わりを，冷静に省みることができた朝だった．

この日の最初は，MIT から発信された技術やその歴史などが展示されている MIT Museum を訪れた．近くからはマリリン・モンローに見えるのに，遠くからはアインシュタインに見えるという「ハイブリットイメージ」と呼ばれる不思議な絵があり，芸術作品としてだけでなく，視力矯正に活用する可能性についての研究が進行中であるとのことだった．そのほか，歴代の人工知能の進化についてや，人間の触覚をシミュレートする機械，表情でコミュニケーションをとれるロボットなども展示されていた．私たちが普段学んでいる分野とは全く異なる工学の領域に触れ，自分自身の価値観や視野がより広がったように感じた．

MIT の見学後は，ボストン郊外にある WRENTHAM VILLAGE PREMIUM OUTLET へバスで向かった．ここは，アメリカ人が週末に買い物を楽しみながら，家族一緒の時間を過ごす場所のようで，多くの客が訪れていた．私たちも現地の買い物客に混じってお土産などを購入し，アメリカ人の典型的な週末の過ごし方を大いに満喫しながら自由な時間を過ごした．

第７日目：９月13日（日）

日本へ帰国する日の朝は，すでに日課となったジムやプールでの運動を済ませ，食べ慣れたベーコンやソーセージ，作りたてのオムレツを提供してくれたシェフに，感謝を込めて挨拶をした．その後，時間に余裕をもって早めに Sheraton Boston Hotel を出発しBoston Logan International Airport へと向かった．搭乗手続きを行っている最中に，航空会社の CA に「日本語で Thank you はどのように発音するのか教えて」と英語で声を掛けられたので，「ありがとうございます，と言います」と英語で答えることができた自分の小さな成長が，なんだか嬉しかった．次に訪れる時には，今以上に成長しているように日本で頑張るぞ，と強く心に決め，この一週間でお世話になった人たちとの出会いへの感謝と別れの寂しさを感じながら，乗り継ぎの Detroit Metro Airport へ向かう飛行機に乗り込んだ．Detroit Metro Airport での乗り継ぎは45分間しかなく，空港の中にモノレールが走るような大きな空港内を全員がスムースに移動できるか心配だったが，全員無事に乗り継ぎ，成田国際空港へは，定刻である16時05分に無事到着し解散した（写真11）．

今回のボストン研修の実施にご尽力いただいた櫻井理事長先生，佐藤学長先生，高倉先生，引率の先生方，一緒にこのイベントに参加した専門学校の学生の皆様，また現地では，お忙しい中，私たちのために時間を作ってくださった先生や学校関係者の方々，更にはずっと行動を共にし，表からも裏からも支えてくれた添乗員の穴吹さん，そして今回の研修の出発から帰国するまでをコーディネートしてくださった二川目さん，こうした多くの皆様からのご支援，ご協力があったからこそ，たくさんの非常に充実した研修を無事に終えることができました．この場を借りて改めて皆様に深く感謝いたします．上述のように，私たちは今回の研修でとても多くを学び，様々なことを実際に体験することができました．参加した学生全員にとって，これらの経験は大きな心の変化を生んだ貴重な時間だったと思いますし，一生の財産になったと思います．これからはこの経験を生かし，社会により多く貢献できるよう心掛けて人生を歩んでいきたいと思っています．本当にありがとうございました．

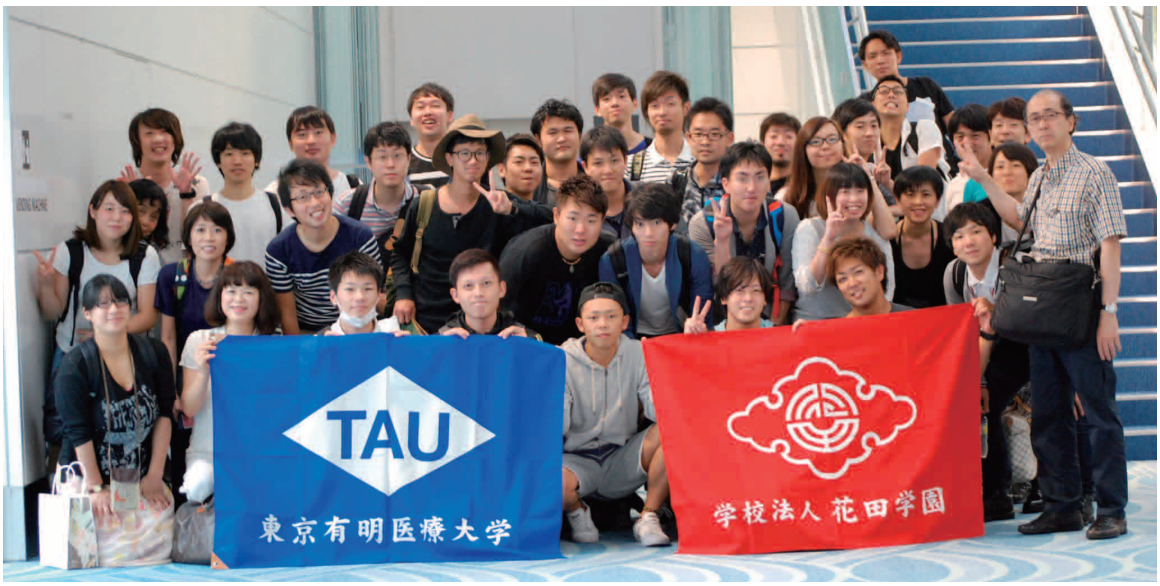

写真１　真夜中に羽田空港を出発

写真２　ボストン美術館にて

写真３　MCPHS UniversityのHumphrey国際プログラム副センター長のお話

写真４　MCPHS Universityの図書館

写真５，６　NESAのKay先生による経絡治療の実習授業

写真７，８　Kaptchuk先生のオフィスでの講義

写真９　Martinos CenterでのKong先生の講義

写真10　Massachusetts General Hospitalのエーテルドームにて

写真11　成田空港に無事に到着

第３回ボストン研修（ボストン研修2015）を振り返って

保健医療学部鍼灸学科　学科長・教授　　**高倉　伸有**

鍼灸学科が主催するボストン研修は，アメリカの生活・文化・自然・歴史などに触れ，人生観や世界観を広げ，世界の鍼研究を牽引する科学者の講義や先生たちとの触れ合い，アメリカにおける鍼灸の教育機関や研究機関での研修等を契機に，グローバルな視点を養い，国際的に活躍したい，日本の鍼灸を世界に広めたいなど，大きな夢や志をもつ人材の育成を目指して2011年に始めました.

「国際性に富む有為な人材を育成する」という本学の教育理念に賛同してくださった，本学客員教授である Ted Kaptchuk 先生は，Harvard Medical School の教授であると同時に，Beth Israel Deaconess Medical Center のHarvard-wide Program in Placebo Studies and the Therapeutic Encounter（PiPS）の部門長もされている，代替医療の研究では世界的に有名な科学者で，第１回ボストン研修から講義をしてくださっています．Ted 先生の論文は，つい最近も New England Journal of Medicine に掲載されるなど，世界の医学をリードする世界五大医学雑誌をはじめ，名だたる専門学術誌に多数掲載されています．Ted 先生はこれまで同様，私たちを温かく迎えて下さり，最新の研究結果をもとに鍼の効果やプラシーボ効果について分かりやすく講義をしてくださいました．講義のあとの質疑応答の時間では，学生からの質問が次から次に飛び出し，ほぼ１時間ものあいだ学生の質問に丁寧に答えてくださいました.

同じく第１回ボストン研修から講義を引き受けてくださっている Jian Kong 先生は，Harvard Medical School 精神科の准教授，Massachusetts General Hospital の Associate Researcher で，fMRI を使った鍼，痛み，プラシーボの研究で世界的に名前が知られている研究者です．Jian 先生の研究成果は，Proc. Nati. Sci. USA，Neuroimage，Pain，Molecular pain などの有名な専門学術誌に多数掲載されています．今回も Jian 先生の研究拠点である，脳の研究では世界最高峰の Martinos Center for Biomedical Imaging で講義をしていただきました．今回の講義のテーマは，最新の情報をもとにした，痛み，特に慢性痛時の脳機能や器質的変化について，そして鍼の効果，プラシーボ効果など，難解ではありましたが大変興味深い内容でした.

さらに今回の研修では，MCPHS University（以前の大学名は Massachusetts College of Pharmacy and Health Sciences）を研修先として新たに加えることができました．今年４月に，鍼師と漢方薬の資格を取得できる，アメリカで最も歴史がある大学院大学 New England School of Acupuncture（NESA）が，学校名はそのまま残して MCPHS University に吸収合併され，MCPHS University を構成する10校の内の１校となりました．MCPHS University への訪問は，その吸収合併の中心的役割を果たした International Programs Center for International Studies の副センター長である George E. Humphrey 博士が，博士課程を開設したばかりの私たち鍼灸学科に興味を持ってくださったことや，NESA の前最高経営責任者で前校長の Susan Gorman 先生の特別な計らいにより，思いがけず実現しました.

MPCHS University は，1823年に Massachusetts College of Pharmacy として設立されたボストンの Longwood Medical and Academic Area にある私立大学で，薬学とヘルスサイエンスの高等教育を専門とし，アメリカで２番目に古く約7,000名（留学生約11％）の学生を擁しています．ボストンキャンパスには George Robert White Building，Ronald A. Matricaria Academic and Student Center，John Richard Fennell Building，そして Richard E. Griffin Academic Center の４つの主要な建物がありました．そのほか Massachusetts 州 Worcester，New Hampshire 州 Manchester にもキャンパスあるそうです．大学周辺には Massachusetts College of Art and Design や Harvard Medical School などの著名な大学や，Children's Hospital Boston，Dana-Farber Cancer Institute，Brigham and Women's Hospital，Beth Israel Deaconess Medical Center など，有名な大学や病院が立ち並んでおり，まさに Medical and Academic Area という雰囲気でした.

MCPHS University は，School of Pharmacy，School of Physical Therapy，Forsyth School of Dental Hygiene，School of Arts and Sciences，School of Medical Imaging and Therapeutics，School of Nursing，School of Optometry，School of Physician Assistant Studies，English Language Academy，NESA の10校からなり，さらには Medicinal Chemistry，Pharmacology，Pharmaceutics，Public Health，Optometry，Physical Therapy，Physician Assistant Studies，Drug Regulatory Affairs and Health Policy 等の分野の博士課程を持っています．また，Dental Hygiene，Magnetic Resonance Imaging，Nuclear Medicine Technology，Diagnostic Medical Sonography，Computed Tomography，Radiography and Radiation Therapy for Medical Technologistsの分野においては，学部と大学院の間に位置する教育課程“post-baccalaureate bachelor of science programs and advanced certifications“を用意しているそうです.

MCPHS University では International Research & Strategy のディレクターである Ita Herouet さんによる大学の説

明，キャンパス内ツアーのほか，副センター長の George 先生，Susan 先生，そして International Research & Strategy の方々とビッグピザを囲んでの楽しいランチタイムなど，大変有意義なひと時を過ごすことができました．今回の訪問では，急きょ日程に加えたこともあり，講義などを組み入れることができませんでしたが，今後は可能であればそのような内容も組み入れたいと考えております．

NESA では，2012年に NESA の第６代校長兼最高経営責任者に就任し，NESA の改革，研究，地域や大学等とのパートナーシップの構築を推進し，今回の MCPHS University との合併でも中心的役割を果たした Susan Gorman 先生が，終始温かい笑顔で私たちを迎えてくださいました．今回の研修では日本式鍼治療を実践し，精力的に日本の鍼を広めている Joseph Kay 先生の本治法と標治法の講義と実習を体験させていただき，学生にとっては親しみやすい内容でした．MCPHS University に吸収合併された NESA が，今後どのように発展していくのか，私たちも期待を寄せています．

３回目のボストン研修2015は，これまでの２回とは異なり，午前０時30分に羽田空港を出発，ロサンゼルス経由で午前６時30分にボストン・ローガン空港に到着というタフなスタートでしたが，５泊７日の盛りだくさんの研修を終えて，引率教員を含む42名全員が無事に帰国しました．今回のボストン研修でも，Harvard Medical School の Ted 先生とJian 先生，NESA の Susan 先生と Joseph 先生，Martinos Center の Bruce 所長をはじめとし，今回初めてお目にかかった MCPHS University の George 先生，またアメリカで日本人の先駆者的鍼灸師として成功されており，出発直前に治療院を見学させていただくことになった桑原浩榮先生，そして通訳を担当してくださった Ikumi 先生と Annie 先生など，多くの先生方のサポートはもとより，初回よりご支援くださった櫻井理事長，佐藤学長，鍼灸学科の諸先生方，事務局の方々のご理解とご協力のお蔭を持ち，実現いたしました．皆様に心より感謝申し上げます．